

強度、T2 強調画像で均一で著明な高信号を呈し、特徴的であった。

3) MRI が有効であった口腔底腫瘍

佐藤 正治・足利谷美砂
林 孝文・中山 均
佐々木富貴子・中村太保 (新潟大学歯科)
伊藤 寿介 (放射線科)
福島 祥紘 (同 口腔病理)

口腔底部には、舌筋、舌骨上筋群などといった種々の細かい筋が存在し、画像上でそれらを同定するのは比較の困難である。

今回我々は、口腔底部に発育した腫瘍の1例を報告した。

Sialography, CT, Ultrasonography の画像上では lt-sublingual space 内に腫瘍の存在は疑えたものの、腫瘍とその周囲の筋との位置関係を明確に把握できなかった。

しかし、MRI 画像上では、腫瘍の存在がより明確に描出されており、lt-mylohyoid m. と hyoglossus m. 及び styloglossus m. とに腫瘍が囲まれ、下方で顎下腺と接しているといった、解剖学的な位置関係を明確に把握することができた。

したがって、今回の症例においては MRI が有用であったと考えられる。

4) 頭部 MRI 上興味ある所見と経過を呈したサルコイドーシスの1例

湯川 貴男・三浦 恵子 (新潟大学放射線科)
岡本浩一郎・登木口 進
伊藤 寿介 (同 歯科放射線科)

頭部 MRI で経過を観察したサルコイドーシスの一例を報告した。症例は39歳男性。頭蓋内圧亢進症状で発症した症例である。胸部写真では BHL が認められ、確定は骨生検によって得られた。入院時の頭部 MRI ではよく造影される結節性病変が第三脳室、Monro 孔を充満するように認められ、そのため両側側脳室が著明に拡大していた。同様の病変は鞍上槽、Magendie 孔、Luschka 孔にも存在した。以後プレドニゾロン 60mg で治療を開始し、頭部 MRI で経過を観察したところ、臨床症状の軽快とともにそれらの病変は著明に減少し側脳室の大きさも正常化してきた。本症例は、MRI がサルコイドーシスの中枢神経病変の評価と経過観察に有用であった症例といえる。

5) SIALO-CT の意義

—自験例の検討から—

足利谷美砂・佐藤 正治
林 孝文・中山 均
佐々木富貴子・中村太保 (新潟大学歯科)
伊藤 寿介 (放射線科)

唾液腺疾患の診断において、当科では CT スキャン時に唾液腺造影を行う CT-Sialography を施行しているが、自験例の内、腫瘍性疾患について non-Sialo. の CT 像と比較検討し、興味深い結果を得たので報告する。まず第一に、腺組織と腫瘍との density にあまり差が無い場合、non-Sialo. の CT 上だけではその局在がはっきりせず、CT-Sialography を施行する事で腫瘍と周囲腺組織とを区別する事ができた。第二に、腫瘍が腺体の表層近くにある場合 non-Sialo. の CT 像だけではそれが腺体内にあるのか腺体外にあるのか判別し難く、こういった場合にも CT-Sialography を行い腺組織が造影される事で判定の手掛かりとする事ができた。唾液腺腫瘍の診断において、腫瘍の局在を知る事は非常に重要であるが、CT-Sialography はそれをより明確に描出する事が可能であり応用価値があると思われる。

6) 腹膜偽粘液腫の2例

松本 康男・武田 敬子
西原真美子・木村 元政
木村 元政・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

症例1は10才の男児。主訴は腹部膨満感と全身倦怠感。昭和58年6月主訴出現。近医にて腹部腫瘤と腹水を指摘され、腹水の細胞診で腹膜中皮腫の診断。化学療法行われるも改善みられず翌年1月に死亡。剖検の結果、腹膜偽粘液腫。原発は虫垂の粘液性腺癌の疑い。症例2は62才の女性。主訴は胃部圧迫感と下腹部膨満感。昭和63年9月より主訴出現。平成元年4月には両下肢の浮腫も出現し、婦人科にて同年6月に本症の診断で手術された。本症の画像上の特徴として、CT では大量の腹水・Scalloping・Septation, US では腹水中の多数の隔壁や無数の高エコースポットを挙げることができる。本症例でこれらの所見を認めた。CT 上、癌性腹膜炎・腹膜中皮腫、結核性腹膜炎等との鑑別は困難である。上記 US の所見や腹水中の石灰化の所見は本症に比較的特徴的とされるが、診断には病歴・臨床症状、血液や腹水の所見等を必要とすることも多い。本症例にて US の所見は有用であった。